

チャイルドエデュケア研究所

# 年報 19号 2021

桜花学園大学・名古屋短期大学



チャイルドエデュケア研究所 19号 年報 2021

発行 桜花学園大学・名古屋短期大学

〒470-1193 愛知県豊明市栄町武侍48  
名古屋短期大学 TEL.0562-97-1306 FAX.0562-98-1162  
桜花学園大学 TEL.0562-97-5503 FAX.0562-98-1162  
2022年3月31日発行

2021年度テーマ

「子どもの育ちと安心安全な保育」

# チャイルドエデュケア研究所機構図

## 目的

- 地域の関係機関・団体と連携し、教育・保育、子育て支援等の研究・事業の推進
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関する社会的要請に応える実践・研究・事業の推進
- 大学の教育研究の成果を地域社会に還元し、大学院生・学生等へ研究と学修の機会を提供
- 教育・保育に関する理論的・実践的な課題を、インクルーシブな観点をふまえ、グローバルかつ地域的な視点から研究し、教育・保育の社会的な充実発展に寄与

### 研修・事業部門

- 教育・保育に関わる理論的・実践的な研究と研究会、交流会、公開講座等の開催
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関わる研究と事業  
〈夏季保育セミナー〉
  - ・卒業生支援  
〈冬の講演会〉
  - ・地域へのリカレント教育
- 目的達成のために必要な事業  
〈子育て支援室「さくらんぼ」の運営〉
  - ・子育て交流会
  - ・支援室開放
  - ・さくらんぼ通信の発行
  - ・子育て講座・親子講座
  - ・学生ボランティアの参加

### 研究部門

- 研究所年報等の刊行物の発行
- 国内外の大学、研究機関、地方公共団体、関係団体との学術交流
- 外部機関・団体との共同研究及びそれらの機関・団体からの委託研究  
〈教育・保育・子育てにかかわる研究や実践報告〉

### 相談部門

- 発達教育相談に関わる研究と事業及び教育訓練・研修等

★3つの部門で7つの事業を地域と連携しながら運営していきます。

## 目次

はじめに	【高須裕美】	2
§ 1 研究・実践報告		
(1) 「保育内容演習 環境」の実践記録—子どもの育ちと安心安全な保育を	【原田明美】	3
(2) 1歳児にとって安心できる保育環境について考える—発達の視点から—	【布施佐代子】	5
(3) 持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動の試み	【小島千恵子】	7
(4) 多文化共生保育における保育者の支援	【平野朋枝・小林舞・秋田綾音・久世悠月・工藤依巳・高見咲子・新原奈々花・吉田直以】	9
(5) 親子と自然あそびを楽しむ子育て支援プロジェクト「はぴちる」の活動報告	【杉浦 舞】	11
§ 2 2021年度研修報告		
(1) 夏季保育セミナー（報告）	【平野朋枝】	13
(2) 冬の講演会（報告）	【田端智美】	15
§ 3 2021年度事業報告		
(1) 子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのインタビュー	【伊藤茂美・吉田真弓】	19
(2) 学生の学びの場としての子育て支援室「さくらんぼ」—自由記述の頻出語彙分析から—	【高須裕美・平野朋枝】	21

2022年度事業計画、編集後記

## はじめに

コロナ禍による行動制限が続いた2021年は、ワクチンの普及により徐々に日常生活を取り戻しつつあるように見えてきましたが、2022年は再び感染率が上がり、緊張感が再び高まる年度末を迎えています。保育や子育てに従事する皆様にとっては、多くの子どもが集う保育の場で消毒や感染予防策を引き続き行っている状況に変化はなく、閉園・休業などにより、様々な苦勞と対応に追われた一年を過ごされたのではないかと存じます。

桜花学園キャンパスも、緊急事態宣言下は外部の方々を迎え入れることができず、子育て支援室「さくらんぼ」も開室できない時期がございました。しかし、開室中の予約は、すぐに埋まってしまいますので、支援室での時間は、子育て中の保護者の皆様の安心できる場としてご活用頂いていることが伝わって参ります。本年度は、予約数を5組から7組に増やしましたが、来年度は午後の開室も予約状況を見ながら検討しているところです。

しかし、研究所の大きな目的の一つである「学生に向けた教育活動」は、未だ再開できないまま時間が過ぎております。学生らは、実践の場が多い本学を魅力に入学したにも関わらず、実習だけでなく、子育て支援室「さくらんぼ」にも入室する事ができず、子どもを前に実践したり親子と関わったりする様々な機会は失ったままの状態です。決して広いとは言えない支援室ですが、何とか「学びの場」も提供できるような活用を考えていくことが今後の課題です。

さて、チャイルドエデュケア研究所は、名古屋短期大学・桜花学園大学両大学の保育科・保育学部の共同で2002年に設立した研究所で、研修・事業部門、研究部門、相談部門という3つの部門で活動している組織ですが、本年度は、「一子どもの安心安全な保育」をテーマにした講演事業も計画しておりました。リカレント教育の一環であった夏季保育セミナーは、東海地域を代表する人形劇団「むすび座」様が、紙コップを使った遊びをデモンストレーションして下さり、若手保育者を中心にした卒業生らが、保育者の表現力を学びました。

毎年多くの保育者にご参加頂く冬の講演会では、保育実践家である井桁容子氏によるオンライン講演を実施す

ることができました。子どものエピソード写真から、安心できる保育について再考する機会を頂きました。

研究部門としては、本年報において、1歳児の乳児保育における、発達の特徴や保育士の役割、保育環境についての寄稿がありました。また、外国にルーツを持つ子どもの保育に対応する、カリキュラム開発の必要性についても議論されました。国際化の進む東海圏においては、多文化共生は現実的に直面している課題であると言えます。

実践報告では、本学の保育内容「環境」の教育実践記録から、子どもの育ちを保障するための遊びの充実の必要性と、それを率先する保育者の心持ち（興味関心）がキーワードとして挙げられました。そして、保育士資格を持つ名古屋短大保育科保育専攻の学生による持続可能な開発のための教育（ESD）として活動の報告がありました。

これに加えて、本年報では、現役保育者が学内で行なっている付属幼稚園の園児を対象にした野外遊び企画の実施報告をご寄稿頂きました。その他、教育・保育の実践者への企画などを取り上げた研修内容記録も掲載しております。

最後に、大学における子育て支援室「さくらんぼ」の利用状況から、学生の教育活動における場としての役割について整理しています。学生の個人記述から、親子支援にも目を向けた保育者になるための学びや、実践的な学びの契機、主体的に学ぶ活動につながっている項目を明らかにし、課題を見つけて改善していきたいと考えております。さらに、人数制限を維持しながら続けております子育て支援室の報告として、利用者様のインタビューが掲載されておりますので、ご一読頂けると幸いです。

コロナ禍による社会状況に対応するために、その内容や方法に変更の多い子育てや保育・教育ですが、この年報が、子育て世代・実践・研究組織の皆様にとって、安心・安全の視点や、今後の保育や教育に関わる学びの機会となりますことを願っております。

チャイルドエデュケア研究所 所長  
高須 裕美



# 「保育内容演習 環境」の実践記録

## 子どもの育ちと安心安全な保育を

原田明美（桜花学園大学 国際教養こども学科）  
キーワード：環境 遊び 主体性 興味関心

私は、名古屋短期大学に入職して13年間この科目を担当してきた。「学校教育法」には、「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、 幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」としている。保育所保育指針には「保育は養護と教育が一体として行われている」と示されている。幼稚園教育要領には第1章幼稚園教育の基本に「環境を通して行う」「環境に主体的に関わり」「試行錯誤し」「主体的な活動を促し」「自発的な活動としての遊びは重要な学習であり、遊びを通しての指導」「幼児の主体的な活動が促されるよう」と書かれている。「主体的」の重要性和「環境を通して遊びを通して」が強調されている。そして、授業では今の子どもが置かれている環境、三間が無くなりつつあり、新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、室内あそびが増え運動量の減少、友達とじゃれ合って遊ぶことの減少などを考え合った。

授業「保育内容演習 環境」で、主題としたのは、乳児から幼児までの、大切な主体性を育む「環境構成の在り方」と、「学生たちが楽しい遊びを体験する」ことである。今、学生自身が遊びを知らず、遊びの楽しさを満喫した経験が乏しくなっている。学生同士で遊ぶ感覚は子どもの時の感覚と多少違ったものになるが、でも「子どもの時を思い出した」「楽しかった事を思い出した」という感想も多く聞かれ遊びの目的やねらいを体験できたと考える。今回は、「環境構成の在り方」「授業で行った遊び」を紹介する。

### I 環境構成の在り方

学生の保育実習や教育実習で園に伺ったとき、園庭や保育室内の環境を見て「どんな保育」を行っているのか、「子ども達が本当に楽しく」遊んでいるかが想像できる。そして、子ども達が楽しく遊んでいる園は、保育者もきっと楽しく、誇らしく保育しているだろう。私は次の視点で環境構成を考える。

- ①子どもが遊びを選択できる環境にあるか。加えて子ども達の目線内に玩具が置かれ、また取り出しやすく片付けやすく整理されて置かれているか。
- ②子どもが遊びを工夫し、更に遊びを作り出す環境にあるか。室内では、自由に使える廃材や紙類セロテープなど大切に扱うことを前提として、使用制限されていないか。室外では移動可能な砂場の玩具やごっこ遊びに使える板・廃材・ゴザ・自然の葉・木の実・草花等があり水などが利用制限されていないか。
- ③子どもの年齢や興味関心に合わせた環境が用意されているか。すぐに壊れる製品は避け、想像力・創造力を引き出す玩

具や教材が用意されているか。

- ④身体を十分に動かし、試行錯誤が出来る環境になっているか。何度も失敗が許され、挑戦できる環境となっているか。

### II 環境構成の重要性（安心・安全な保育）

子どもは環境の中で育ちます。環境の中で遊びを覚え、森羅万象に興味関心を持ち、自ら行動して学んでいきます。その環境をどのように構成するか、食事・睡眠も含めてどんな生活をするのか、どんな遊びをどのように体験するのか、それがすべて子どもの生きていく力の土台となります。自分がおもしろいと思ったことに集中して取り組む、文化を学び、メリハリのある生活の中で、遊ぶこと食べることを充実して体験する。それはすべて環境の中で行われます。どのような体験をするかを表しているのが各保育園での環境構成です。そこには人的環境の保育士も含まれます。「自分をちゃんと見てくれる。どんな自分でも受け止めてくれる。」と子どもが思う安心感、信頼関係が大切です。

### III 主体性を育む環境構成（子どもの育ちを保障する）

先に述べましたように、幼稚園教育要領では「主体性」を重視していますが、主体性とは何でしょうか。主体性＝積極性ではありません。主体性＝声が大きいあるいは元気があるでもありません。「自分の中に自分を持ち、思いを伝えることが出来る。考える力を持ち、何が良くて何が悪いかの判断が出来る。そして自分のやりたいことを見つけ力を発揮する」と考えています。その主体性は、人間関係の中で、環境構成の中で育まれます。保育所保育指針には、0歳の保育を乳児保育とし、その保育の内容を3本の柱としています。

- ①「健やかに伸び伸び育つ」……生きていく土台となる体力・しなやかな体づくり、食睡眠遊びの生活リズムです。
- ②「身近な人と気持ちが通じ合う」……人への愛着や信頼を土台として見守られている安心感満足感を培い、気持ちが通じ合うための言葉を習得していきます。
- ③「身近なものに関わり感性が育つ」……身近なものに興味関心好奇心を持ち、自ら手を伸ばしつかみ口の中に入れ、試行錯誤しながら、周りの環境に働きかけ、感動し、喜びを感じながら表現豊かになります。

この3つの柱は今後生きていく力としてとても重要で、①は生きる生命力の土台を作り、②は人から認められ、大切に思われることで安心感や満足感が育ち、③の環境に対して、自らおもしろいと思い、ワクワクドキドキしながら遊ぶことで意欲・興味関心が育つ。①②③を保育する中で0歳からの保育や環境

が主体性を育む土台となる重要性を持っている。保育者が棚から選んで「これで遊びなさい」とブロックの入ったかごを子どもに与えるのではなく、子どもが自分で「今日はこれで遊ぶ」と決め、子どもの試行錯誤が保障される環境が必要です。失敗をさせない保育ではなく、失敗をする経験が必要なのです。

#### IV 遊びの充実の必要性

再掲するが「保育は環境を通して行われ、子どもは環境に主体的に関わることで、試行錯誤しながら考えたりするようになる」「子どもの自発的な活動としての遊びは重要な学習であり、遊びを通しての指導」が中心であると、幼稚園教育要領に書かれている。つまり、乳幼児期は遊びを通して考え工夫し学んでいるのである。そして模倣やあこがれを培う中で自分の成長を望んで自らを成長させ、そして遊びの中で、集中力や自励心や達成感やおもしろさが育まれ、夢や希望、目標を持って生きる力となっていくのである。その遊びを指導するのが、保育者である。しかし、将来保育者になる今の学生をみると子ども時代に十分遊びきっていない、鬼ごっこ、かくれんぼをしたことが無い学生も散見される。また、自然に対する感動の力が薄れ、虫や落ち葉に対しても「きもい」「さわれない」「汚い」という学生が多くなってきた。その為、環境の授業ではなるべく遊びの楽しさを体験することを大切にしたい。次は今までの授業で行った遊びである。これは、今までに行った遊びをまとめたもので、全てを一学年に行ったわけではない。遊んだ後は、「何が楽しかったか」「この遊びの魅力は何か」「子どもに指導するときの配慮」等の考察を行った。

#### V 授業で行った遊び

①さくらの花びらでカードを作り、レンゲソウの花で花冠を作る。



①さくらの花びらで作ったカード

②ダンゴ虫競争：ペットボトルの蓋に一人一匹のダンゴ虫を捕まえ、(きもいと

言って触れない学生が増えたが……) 紐で作った輪の中に、4・5人の学生のダンゴ虫の入った蓋を伏せ1・2・3で、蓋を取り、誰のダンゴ虫が一番早く紐に到着するかを競う。

③紅葉の落ち葉を拾って作品づくり：学内を散策して様々な落ち葉を拾い、色・形を楽しみながら白い布の上に作品を作る。

④樹木の観察

⑤集団遊び：はないちもんめ・だるまさんがころんだ・あわぶくたつた・うずまきじゃんけん・火水木等

⑥ドングリ拾い・どんぐりレポート・どんぐりの作品



③紅葉の落ち葉で作品づくり

⑤集団あそび「はないちもんめ」



⑥拾ったどんぐりでおもちゃづくり

⑦乳児の遊び：シフォン布でいないいないばー・手遊び

⑧言葉遊び：しりとり・反対言葉あそび・猛獣狩り・変身言葉・かるた・絵本・お手紙ごっこ等の遊びは文字への興味関心を育てる遊びとしてふさわしい。言葉が音節分解されて子どもに理解されること、いろいろな言葉に意味がありそれが文字で表現できること、文字が読めれば理解がすすみ文字への興味関心が沸く。ワークブックで文字を強制的に教えるより、興味関心が高まり、書き言葉に意欲を持つ環境を作ることができる。

⑨お手玉：遊びの環境の中で、数の概念を知ることが出来る  
その他あやとりなど

⑩積み木遊び：想像的創造力を育む



⑩積み木あそび

#### VI 学生に伝えたかった心

保育者になる学生に伝えたかったことは保育者が率先して次の心を持ち、それを子ども達にも芽生えさせて欲しい。

①人を信頼し、自分を信じる心

②何事にもワクワクドキドキし、目の前の事象に興味関心を持つ、感動する心

③真似をしたい、憧れを持って自分を成長させることに貪欲になる心

以上を大切にして授業を行って来ました。



# 1歳児にとって安心できる保育環境について考える ～発達の視点から～

布施佐代子（桜花学園大学 保育学部）

キーワード：1歳児 安心 保育環境 心身発達

## はじめに

1歳児（ここでは保育所等での1歳児クラスに相当する1歳過ぎ～2歳後半頃までの子どもを指す）の時期の発達の大きな特徴は、1歳半頃に発達の質的転換期（「1歳半の節」）を迎え、それを乗り越えて乳児期から幼児期へと移行していくことである。

子どもにとって新しい力を獲得していくことは喜びではあるが、その過程は容易ではないことが多い。とくに飛躍的な発達を遂げる節目の時期には、新しく獲得しつつある力を少しずつ蓄えていく際に、心身共に不安定になりやすいことが、保育現場からも多々報告されている。本稿では、「1歳半の節」をどの子ども迎える1歳児保育のなかで、子どものさまざまな姿を保育者はどのようにとらえ、保育環境として何を大切にどんな工夫が必要か、発達の視点から考えてみたい。

## 1歳前半と1歳後半の発達の一般的な特徴

### (1) 1歳前半

一口に1歳児といっても、1歳半以前（前半）と1歳半以後（後半）では発達の特徴が大きく異なる。保育を考える際には、この違いをよく理解しておく必要がある。1歳前半では、一般的な目安として次の4つの点に発達の特徴がある。

#### ①一人歩きの開始

支えられずに自分一人で直立二足歩行ができるようになり、フラフラと一人歩きを楽しむ姿が見られる。

#### ②表象（イメージ）の世界の始まり

目の前にその物が実際になくても頭の中に思い浮かべることができるようになり、絵本の中のケーキをつまんで食べるふりをしたり、1語文が始め、犬を指さして「ワンワン」と言ったりするようになる。

#### ③自我の芽ばえ

まだ上手に持てないのにスプーンで食べてみようとするなど、自分でやってみたい気持ちが芽ばえ始める。

#### ④大人との共同活動が活発になる

大人のことや使っている物に関心を持ち、自分も同じようにやってみたい気持ちが高まってくる。大人と一緒に体を動かしたり遊んだりすることを喜び、自分の興味がある物を大人に見せに来たりなど、大人と一緒に活動を重ねる中で、大人言葉かけに支えられながら自ら行動する力が育っていく。

### (2) 1歳後半

1歳後半では、一般的な目安としての発達の特徴は次のとおりである。

#### ①歩行の確立

一人歩きがしっかりしてきて、めざすおもちゃまで歩いて行って遊ぶなどの姿も見られるようになる。

#### ②表象の世界の広がり

お母さんや保育者のつもりになって、人形をトントンやさしくたたいて寝かしつけるなど、生活の中で得たイメージを遊びの中で再現したり、絵本を持ってくるなどの簡単な用事を頼むと持って来たりなど、目的を持った行動もできるようになる。

#### ③自我の拡大

「～したい」という自分なりの「つもり」(意図) や「自分のもの」という意識が明確になってくるなど、自我が拡大していく様子がよく見られるようになる。「イヤ」とだだをこねたり、他児とおもちゃを取り合ったりなどの姿が多くなる。

④大人と同じようにやってみようという気持ちがさらにふくらみ、生活の中での大人の行動の模倣が盛んになる。

## 「1歳半の節」を越える意味と保育者の役割

このように、「1歳半の節」を越える頃から、子どもは「自分でやった・やれた」という達成感を感じると、「もっとやってみよう」とさらに活動をつくり出していき、行動の主体としての自分をとらえられるようになる。また、ことばを仲立ちとして他者とコミュニケーションすることもでき始めるため、目の前にいない他者とも目的や達成感を共有することが可能になる。

しかし、発達の節目というものは本来、一人ひとりが発達の過程において直面する壁のようなものであり、大人が越えさせるものではなく、あくまで子ども自身が自分の力で越えていくものである。

「1歳半の節」を子ども自身が越えていくためには、その土台となる力として、次の2つの力がしっかりと身につけていることが必要であると考えられる。

①大好きな大人を求める気持ちが高まり、大人に自ら関わろうとする力（生後8カ月過ぎ頃～）

②子ども自ら主人公となって人間関係を結んだり、生活の中で自分でしたい気持ちをふくらませたりしていく力（生後10カ月過ぎ頃～）

これらの力は世話をしてくれる身近な大人との間で、0歳児の頃から安心して自分の要求を出し、それを理解し叶えてもら

う毎日の経験の繰り返しの中で培われる。エリクソンの発達理論において、人間の最も基礎的で人間性の形成上重要な「基本的信頼の獲得」とも関わる部分と言えよう。1歳児保育では、一人ひとりの子どもの中に、それらの土台となる力が充実してきているかどうかを丁寧に確認し、不十分な場合はその土台を再度つくり直していけるような配慮や安心して自分の思いを出せる保育環境づくりも必要となる。

## 1歳児にとって安心できることの重要性と保育環境

1歳児期は、前述のように「1歳半の節」の前後から表象が可能になり、見たり聞いたりしたことがある馴染みの事物とそうでない事物も識別可能になるなど認知機能の発達が目覚ましいため、初めてのことやよくわからないことに出会うと不安を抱き、不安定な行動が見られやすくなる。

そんな中で近年、保育所等では育児休業明けの入所や年度途中入所が増えており、1歳児クラスへの新入園児も0歳児クラスからの持ち上がりの進級児も、それぞれの不安を保育者に受けとめてもらい安心して新しい環境に馴染むことが大きな課題のひとつとなっている。加えて、昨今はさまざまな家庭事情から子どもの生活にストレスが多くかかる例も珍しくはなくなってきた。そうしたストレスの影響は低年齢児ほど受けやすく、ことばでうまく表現できないためさまざまな行動として表れることがあり、気持ちの崩れやすさや立ち直りにくさにもつながる場合がある。

こうしたことから、1歳児期は乳幼児期の中でも「安心できる保育環境」がひととき必要かつ重要と考えられよう。保育所保育指針でも、とくに3歳未満児保育において、養護をベースとして、安全で安心できる心地よい生活の場としての環境が重要視されているのは周知のとおりである。では1歳児保育では具体的にどのような工夫が可能か、実践例をもとにさらに考えてみたい。以下の実践例は、あいち保育共同連合会保育部会主催の1歳児実践検討会（2021年11月6日開催）で提案されたものである。

## 1歳児が安心できる保育環境づくりの工夫

### 【例1】

0歳児の頃から不安が強く、まわりが気になったり、午睡も短時間で起きてしまったり、友だちへのかみつきも多くなってきた6月生まれの子。朝の登園時間が他児より遅いため、登園すると他児の遊びに参加しにくく、友だちから声をかけられて

もドキドキしている様子。

そこで保育者は保育室ではなく、園庭でその子を受け入れ、その後好きな遊びに向かえる流れをつくるようにして朝の受け入れに丁寧な工夫を試みたところ、自ら次の行動に向かっていく姿が見られるようになった。また、目で見てわかりやすく行動の見通しが持ちやすい働きかけを大切にしたことにより、登園直後からすぐに気持ちよく安心して活動をスタートでき、そのように工夫してくれた保育者への信頼感の深まりへ、さらには友だちに目を向け受け入れる気持ちの余裕へとつながっていった。また遊ぶ時間を十分に保障できたことで遊びの満足感につながり、午睡も気持ちよく眠りに入っていけるようになった。

### 【例2】

園舎の新築工事という事情から1歳児18名が1つの部屋で生活せざるを得ず、新入園児が多いが担当保育者は持ち上がりではないという条件の中で、子どもたちが安心できるように楽しい雰囲気づくりをしたり、着替えや手洗いに時差をつけて少人数で行うなど子どもたちにとってわかりやすいよう工夫した。

しかし、1歳児にとって集団が大き過ぎて不安の要素が多いことから、月齢で2つのグループに分けて保育室内の環境も変えるなどの工夫をしたところ、生活が落ち着き、互いの遊びも壊されることが少なくなり、安心して遊びも楽しめるようになった。

そんな中で、2歳過ぎ頃から「ダメ。ゼンブジブンノ」とおもちゃを独り占めし、友だちとおもちゃの取り合いが目立つ、クラスで一番月齢の高い子がいた。月齢の近い子には安心感があるのか自分から遊びに誘う姿もあったため、大人が間に入って思いを代弁し伝えることも大切につつ、相手にも思いがあることに気づけるような「間」をつくってみた。友だちと一緒に遊びながら心地よい関わりを積み重ねていくことにより、他児との楽しい共感の姿が増えた。

以上のように、1歳児保育では、大人や友だちとの落ち着いた心地よく過ごせる安心できる生活の中で、安心感と満足感を感じながら友だちの存在や思いも受け入れ、遊びのイメージがふくらみ、友だちとの楽しい遊びへとつながっていく。落ち着いた安心できる生活と楽しい遊びを十分に保障できるよう、1歳児の心とからだの健やかな育ちにとってふさわしい保育環境のあり方について、今後さらに発達の視点から実践に深く学び追求していきたい。



# 持続可能な社会を創造していくことを目指す 学習や活動の試み

小島千恵子（名古屋短期大学 保育科）

キーワード：SDGs ESD 次代を担う子ども・保育者

## はじめに

2015年9月に開催された国際連合サミットにおいてミレニアム開発目標が2015年に終了することに伴って、「SDGs（持続可能な開発のための目標）」「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。持続可能な開発目標は、17の世界的目標、169の達成基準、232の指標からなる2030年までの具体的指針である。

2021年度、保育科では、「私たちの地球について考える」という選択科目を新設した。この科目設置の目的は、今、私たちが住む地球が温暖化や海洋汚染などで危機的な状況にある現状を理解すること、SDGsとは何か、何をめざしているのかを考えることにある。

また、授業を通してSDGsは、世界中のすべての人々が達成を目指す目標であり、目標を達成するためには、文化や考え方が違う世界中の人々がともに成長しながら、他者を思いやり、協力し合うことが大切であることを、21世紀を支える（次代を担う）子どもに、保育者としてこのことをどのように伝えていくとよいのか考えることができるようにしたいと考えた。日本は、経済と産業の進んだ「先進国」であるが、持続可能な社会をめざすことについては、世界的に見ると遅れていることを理解し、一人一人が次世代を生きる者として、この課題を積極的に受けとめ、具体的に何ができるのか考えていけるような授業展開を試みることにした。



図1 「SDGs（持続可能な開発目標）」17の目標169のターゲット

## 1 持続可能な開発のための教育 (ESD : Education for Sustainable Development)

ユネスコは、現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育を提言している。

育みたい力として掲げているのは次の6つである。①持続可能な開発に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等）②体系的な思考力（問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方）③代替案の思考力（批判力）④データや情報の分析能力 ⑤コミュニケーション能力 ⑥リーダーシップの向上。

学び方については、「関心の喚起 → 理解の深化 → 参加する

態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置付けること。単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチをとること。活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと。というように、参加型で探求や実践を重視するという、動きながら学びを深め、自分で考え判断して行動できるようにすることを目標としている。



図2 「ESD」の基本的な考え方

## 2 授業として取り組んだ内容

ユネスコの「ESD」の基本的な考え方を取り入れて単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチをとること、活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すことを目的とした次のような授業内容を考えた。①身近で感じられる地球温暖化や環境破壊について実際に調べてみる。②自分自身に何ができるのか考え合い、身近なところから取り組み実践してみる。③私たちの地球を守るために、次代を担う子どもに何をどのように伝えていくとよいのか考え、グループでまとめて発表などし、地球環境を守ることに認識をさらに深め、保育者になってからも実践できるように方向づけた。自分たちが暮らす地球を取り巻く環境が、どのように変化しているのか、便利になった生活が地球環境にどのような影響を与えているのか、この変化が環境にどのような影響を及ぼすのか専門家の話を聴いたり、学内外を散策しながら、持続可能な社会をつくるために自分たちに何ができるのか考えながら実行してみることとした。具体的な授業内容は以下の通りである。

- ☞ SDGsについて理解を深める。DVD視聴（海洋汚染・絶滅危惧種・気候変動・地球温暖化等）
- ☞ 持続可能な社会についての討論：Foodロスについて考え、自宅の冷蔵庫調査や冷蔵庫に残っている材料を使って自分で弁当を作って持参し検討する。
- ☞ 学外に出て考えてみる。公園を散策しながら「生命」について考える。（インタープリターと歩く大高緑地公園）・常滑りんくうビーチの清掃活動をとおして、マイクロプラスチックによる海洋汚染を実感する。
- ☞ 持続化の社会づくり：自分ができることについて考える。自分への問いを出し考えてみる。
- ☞ 持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）の担い手（保育者）として子どもたちに何をどのように伝える。・討論・レポート作成「私たちの地球について考える」の授業の他にも、専攻科保育専攻の国内タイプ1年生の基礎演習のテーマもSDGs・ESDとし、こちらでは、CO<sub>2</sub>削減に効果があるという「ローゼル」

を学内の畑で栽培し、「すべて食べることができる」を実践した。また、自宅冷蔵庫の賞味期限切れの食品を持ち寄り、調理して食べてみるということを試みた。

### 3 活動の様子

#### (1) Food・ロスを考えてみる

「私たちの地球について考える」の授業では、冷蔵庫にある材料で弁当を作った。専攻科では、賞味期限の切れたもので調理するという活動に取り組んだ。それぞれ自宅の冷蔵庫を調査してみたり、家族と一緒に買い物に出かけたりして、日常の買い物の仕方が多めに買ってしまった、衝動買いをして冷蔵庫にしまい込み、消費期限が切れ捨てるということになっていることに気がついた学生が多かった。「何をどのくらい買うのがよいか」と考えることが必要なことに気づいたようであった。賞味期限、消費期限の区別を理解することの必要性を実際に調理しながら実感していた。また、毎朝弁当を作ってもらったことへの感謝や、食べられることへの喜びを授業後に振り返る姿も見られた。



写真1 Food ロスを考える



写真2 冷蔵庫残り物カレー

#### (2) 海洋汚染（マイクロプラスチック）を考える

常滑市りんくうビーチにおいて、「私たちの地球について考える」の授業、専攻科基礎演習においても清掃活動を行い、海洋ごみ、マイクロプラスチックを実際に見たり、ごみを分別したりしながら、事前学習した海洋生物がごみやマイクロプラスチックを飲み込んでしまうこと、それが人体にも影響することを実感した。

韓国や中国の印字があるゴミや、細かく砕かれたプラスチックごみを集めながら、ため息をついたり、自分たちがポイ捨てしたものがこの中にあるかもしれないとつばやく学生もいた。



写真3 清掃活動



写真4 収集したごみの一部

#### (3) 大高緑地公園を散策して「生命」を感じる

インタープリターの鉄崎氏を招いて大学近くの大高緑地公園を散策した。「見る・触る・嗅ぐ・聴く・食べてみる」等の五感を通して「生命」を感じる授業を行った。公園内をのんびり歩



写真5 公園の散策



写真6 散策後の講義

きながら、葉っぱのにおいを嗅いだり、どんぐりを拾ったり、食べてみたり、鳥のさえずりを聴いたりして、感覚を敏感に働かせてたくさん感じる一日を過ごした。その後、絶滅危惧種などの話を聴き、「生命」について考える一日となった。学生たちは、ゆったり流れる時間の中で、様々な感覚を働かせて、考える一日となったようである。

### 4 まとめと今後の課題

新型コロナウイルスの感染拡大により、活動の延期を余儀なくされたものの、学生の興味関心が薄れることなく1年をかけて目標を達成することができた。最後のまとめの中で学生は、「今まで、地球について考える機会があっても、どこか他人事で、聞き流していた。～中略～しかし、様々なことを学び、体験し、知ったことにより、今は他人事であると思うことはない。大高緑地で五感を使って、自然の美しさや、生き物や植物などが一生懸命生きていることなどを知った。そして、りんくうビーチで、落ちているゴミや海に浮いているプラスチックなどを実際に自分の目で見てみて、人間の行動ひとつで、この大きな自然に影響を与えてしまうということを知った。自分ができることは何か、これを必ず考えるようにしたい。」また、「子どもは、将来の地球を支えていく存在になる。保育者は、子どもに多くの影響を与えるからこそ、子どもたちが将来よりよく生きていけるように、自然の魅力を子どもに伝え、地球を守っていかなければいけない。私は、子どもに地球や自然がいかに、楽しくて美しく、儚いものなのかを伝えていきたいと思った。」という内容のレポートが多く寄せられた。持続可能な社会をつくる取り組みは、始まったばかりである。今年度のこの活動の灯を絶やすことなく繋げる。これが地球に生きる私たち人間の使命ではないだろうか。

#### 参考資料

- ・ 秋山宏次郎（監修）こども SDGs（エスディー・ジーズ）なぜ SDGs が必要なのか分かる本（2020）KANZEN
- ・ 外務省 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>（最終閲覧：2021/12/6）
- ・ 日本ユネスコ公共連盟 <https://www.unesco.or.jp/teacher/esd-international-exchange-program/>（最終閲覧：2021/12/6）



# 多文化共生保育における保育者の支援

平野朋枝・小林 舞・秋田綾音・久世悠月・工藤依巳・高見咲子・新原奈々花・吉田直以（名古屋短期大学）  
 キーワード：多文化共生保育 外国にルーツのある子ども 支援

## 1 はじめに

1980年代後半頃より、日本に在住する外国人の数は急激に増加してきた。このような社会の変化を受けて、日本国内の保育施設には、外国籍の子どもや外国の文化で育った子どもの入所・入園が増えている。しかし、日本では、ごく最近まで日本人の子どものみを受け入れている保育施設が多く、日本語が母語ではない家庭や文化の異なる家庭への対応や支援について十分な知識や経験を持ち合わせていない。さまざまな文化的背景を持つ子どもたちを共に育てる多文化共生保育の実現は、日本の保育における喫緊の課題であると言える。

ト田（2012）は、日本における多文化共生保育研究の動向について整理する中で、地域の多文化化の状況要因による実践の違いや、状況の違いに応じた実践のありようを検討し、より具体的な多文化共生保育の指導法の確立が求められると指摘している。また、石塚（2018）は、多文化社会であるフィンランドの保育実践を検討し、多文化共生保育では、保育者のカウンセリングマインドを前提として、幼児の文化や言葉の違いに応じた援助が必要であると述べている。

本稿では、愛知県内で20年以上前から外国にルーツのある子どもを受け入れてきた複数の保育施設における支援の事例を参考に、多文化共生保育における保育者の支援のあり方を整理することを試みた。

## 2 日本における多文化共生保育の現状と課題

総務省は平成17年度に「多文化共生の推進に関する研究会」を立ち上げ、「多文化共生」を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義して、その推進について検討してきた。ここでは、このような多文化共生を実現する力を育む保育を「多文化共生保育」として捉えることとする。また、「外国人」や「外国籍児」として言語や文化的背景が外国に由来する子どもについては、「外国にルーツのある子ども」と表記する。

1990年の出入国管理及び難民認定法の改正以降、在留外国人が増加した。愛知県内では、自動車関連産業の労働力不足を背景に、岩倉団地、保見団地、知立団地など、外国人が集住する地区が生まれていった。このような地区の保育施設では、外

国にルーツのある子どもが急激に増加し、言語コミュニケーションの難しさや文化・価値観の違いなどによる多くの課題に直面することとなった。

三井ら（2017）は、外国人居住者の増加への教育・保育面での対応について、小学校以上の外国人児童の学校適応と日本語指導が国の政策の中心となっており、保育に関する政策と言えるべきものは存在しないことを指摘している。外国にルーツのある子どもの保育に関する対応は自治体に任されており、外国人の集住地区を管轄する自治体がそれぞれに支援を行っているのが実情である。保育施設における個別の支援については、保育施設の職員がその都度対応の仕方を考え、工夫しながら対応してきた。しかし、専門的知識を必要とする場面も多く、時には支援の仕方を誤ることもある。一例を挙げると、ある公立保育所では、来日して数ヶ月で入所した外国籍の幼児について、落ち着かない様子や暴力的な行為から、発達障害の可能性が高いと判断した。しかし、これらの行動は環境の変化と言語理解の困難さによるものであったことが後に判明した。このように、対応する自治体や保育施設の職員の努力だけでは、適切な支援をすることは困難である。

多文化共生保育を先進的に実施してきた自治体や民間保育施設で得られた支援方法を整理し、多文化共生保育をさらに充実させることが早急に求められる。また、保育者養成において、多文化共生保育という視点での具体的な支援のあり方を身につけられるようなカリキュラムの開発が重要であると考えられる。

## 3 外国にルーツのある子どもへの支援

筆者らは、愛知県内で10年以上にわたり多文化共生保育を実施してきた5つの保育所の協力を得て、保育場面の参与観察と保育者への聞き取り調査により、外国にルーツのある子どもへの具体的な支援方法について検討した。

### (1) 言語理解のための支援

日本で暮らす子どもには日本語を習得することができるように指導することを基本としているが、保育所内で子ども同士が母国語で話すことを止めないようにしている。これは、言語の習得以上に、子どもの精神的な安定を大事にしたいということが理由である。日本語が理解できない子どもは、保育所にいる間、大きなストレスを抱えているため、言語を限定せずに言葉で自分を表現する機会を保障することでそのストレスを軽減し

たいと考えてのことである。

日本語の理解が十分でない子どもには、保育士がその子の母国語で話したり、翻訳機を使ったりして生活上の必要事項を伝えることもある。また、1日の流れなどを写真やイラストで示すことも有効である(図1)。



図1 生活の場面で必要な事項を伝えるためのイラスト

## (2) 慣習や価値観の違いへの対応

特に問題となる場面が多いのは食事である。食文化は地域によって大きく異なるため、外国にルーツのある子どもは日本の食べ物に馴染むまでに時間がかかる。無理に食べさせるのではなく、一口サイズに小さく切ったり、可能な範囲で代替給食にしたりして対応している。食べられない物が多い場合は、弁当を持参してもらうこともあるが、他の子どもと一緒に給食の時間を過ごすことで徐々に食べられるようになる。宗教上の理由で食べてはいけない食材がある子どもについては、アレルギーと同様に慎重な対応を心がけている。

子どもの頭を撫でるといった行為は保育現場でよく見られるが、イスラム教・ヒンドゥー教では人の頭に触れるのは良くないとされているため、厳禁である。また、肩を軽く叩く行為が暴力的行為と受け取られ、保護者から苦情が来るといった事例もある。日本の保育園では、毎日保育園に登園し、行事には全員が参加することが一般的である。しかし、外国にルーツのある子どもの家庭ではそれが当たり前ではないこともあるため、行事の目的や欠席する際の連絡の必要性を丁寧に説明している。以上のように、保育者は日頃から保護者とのコミュニケーションを図り、子どもの家庭の環境や慣習の把握に努める必要がある。

保育者は、子ども同士の多文化理解を目的として、クラスの

子どものルーツとなっている国の言語や文化を、保育の中で積極的に取り上げている。その国の言語による絵本を読んだり、行事を体験したりすることは、日本にルーツのある子どもたちにとって、その子のルーツとなっている文化を知る機会であると同時に、その子にとっても自分が受け入れられていると実感する大事な機会となっている。

## 4 外国にルーツのある子どもの保護者への支援

外国にルーツのある子どもの保護者とのコミュニケーションの最大の障壁は言語である。外国人の集住地区がある自治体では、学校や保育施設に通訳を派遣しているが、ポルトガル語のみなど言語が限定されており、多くの場合は週に1、2日の非常勤対応となっている。近年は翻訳機が格段に発達したため、多言語に対応することができるようになってきた。

保育者は、外国にルーツのある子どもの保護者と丁寧にコミュニケーションを図るようにしている。簡単な日本語の読み書きができる保護者には連絡帳をひらがなを中心に記載したり、持ち物の連絡では、お便りだけでなくイラストなどを見せて直接伝えたりすることで周知の徹底に努めている。外国にルーツのある子どもの割合が9割を超える民間保育所では、5名以上の通訳が常駐し、全員の連絡帳を翻訳している。

今回調査を行った保育所では、すでに10年以上の多文化共生保育の実績があり、子ども・保護者・保育者が一体となって生活するための様々な方法が取り入れられており、これからの保育に大いに参考になるとと思われる。

## 5 引用・参考文献

- ・ト田真一郎(2012)『日本における多文化共生保育研究の動向』, エデュケア, 第31号, pp. 13-33.
- ・石塚麻衣(2018)『多文化共生保育における保育者の専門性—フィンランドの保育実践に見る日本の課題—』, 聖心女子大学大学院論集, 第40巻1号, pp. 139-161.
- ・多文化共生の推進に関する研究会(2020)『多文化共生の推進に関する研究会報告書~地域における多文化共生の更なる推進に向けて~』, 総務省
- ・三井真紀・韓在熙・林悠子・松山有美(2017)『日本における多文化保育の政策・実践・研究の動向と課題』, VISIO, 47, pp. 31-41.



# 親子と自然あそびを楽しむ子育て支援プロジェクト 「はぴちる」の活動報告

杉浦 舞（桜花学園大学院 人間文化人間科学専攻）

キーワード：子育て支援 親子 自然あそび 感触あそび 戸外あそび 里山 はぴちる

## 「はぴちる」の立ち上げと背景

2021年2月に、名古屋短期大学卒業生の現役保育者2人が立ち上げた子育て支援プロジェクト「はぴちる」は、名古屋短期大学附属幼稚園との共催イベントとして、小川雄二園長と共に名古屋短期大学の敷地内で開催している。活動の様子をSNSなどで発信してきたことで、多くの共感の声があり、現在は、現役保育者や学生、子ども好きの大人、計22人がボランティアスタッフ「はぴちる隊」として登録している。



少子化、子育ての孤立化、激務に追われる共働きなど、現在の子育て世代には様々な問題があり、実際に保育現場で関わる親子もそのような問題に直面していることを日々痛感してきた。仕事が休みでも、保育園へ預ける保護者を目にすることもあり、新人時代は「何故、子どもとの時間を惜しまないのか？」と、疑問に思っていた。しかし、6年間の保育経験により、保護者がいかに日々、仕事と子育てに追われ、心も身体も休むことができているか、ということが見えるようになってきた。「毎日、こなすので精一杯。」そんな声も耳に入る。保護者にとっては、可愛い、大事な我が子である。しかし、大事なあまり、子どもの未来に目を向けがちで、“しつけ”“教育”にばかり意識が向いている保護者の存在も強く感じていた。

そして、もう一つ、現在の子育て世代が抱える大きな問題として、新型コロナウイルス感染症の流行がある。「ステイホーム」が叫ばれる時代を生き延びている子ども達は、ゲーム機器やタブレットとの距離がより近付いただろう。保育園や幼稚園でも、子ども同士の会話で、ゲームやYouTubeの話題が以前にも増して出てくるようになってきたり、戸外あそびより、室内あそびを好む子どもの姿が目につくようになってきたりするなど、危機感を覚えた。しかし、保育職の私たちはあそびのプロフェッショナルだ。子ども達は、家では、部屋の中でゲーム機器やタブレットに夢中かもしれないが、保育園では、子ども達の「楽

しそう」や「やってみたい」を引き出し、戸外でも思いっきり楽しんでいる、以前と変わらない子ども達の姿がある。私たち保育者は、そんな子ども達の顔を近くで見られることが何よりの幸せである。子ども達は、身近な自然と関わったり、友達と一緒に活動する中で、小さな発見をしたり、試行錯誤をしたり、全力で何かに取り組んだりしている。このような姿を保護者と共に見守り、子ども達とワクワクする気持ちを共有したいという思いが強くなっていった。コロナ禍で、なかなか外出できず、家にいる時間が長い親子に、自然豊かな環境で、のびのびと安全にあそべる場を作りたい、そして、保護者が子どもの可愛さを再認識したり、子育ての新たな楽しさを発見する手助けをしたいという願い、また、保護者同士を繋げ、子育て仲間と子育ての悩みや楽しさを分かち合える場を作っていきたいという願いを持ち、「はぴちる」の活動を立ち上げた。

## 活動状況

立ち上げ当初は、2ヶ月に1回の開催を目標にしていたが、Covid-19のまん延防止等重点措置や緊急事態宣言の時期を避け、3月のイベント、4月、7月、11月と4回のイベントを企画、運営した。

### (1) 2021年3月

#### イベント「はぴちる隊と里山で春を見つけよう！」

##### ～香り豊かなよもぎを摘もう～

この日は、名古屋短期大学のキャンパス内の里山にたくさんのおよもぎがあったため、ばばあちゃんシリーズの「よもぎだんご」の絵本を読み、よもぎ摘みをするという内容で実施した。子ども達は、よもぎ摘み以外にも、カラスノエンドウやスズメノテッポウなどの草笛を楽しんだり、たんぽぽ、てんとう虫などを見つけて、小さな春を感じていた。子ども達は何かを発見すると「みてみて～！」とお父さんやお母さんに見せにいき、「ほんとはね～」、「〇〇あったね～」と子ども達に共感する保護者の姿が多く見られ、穏やかな時間が流れていた。活動



の終わりには、聖護院大根の収穫をし、各家庭1本の大根と、よもぎだんごのレシピ、里山の探索で子ども達がそれぞれ見つけた小さな春をお土産に持って帰ってもらった。



家へ帰ってからも親子で振り返ることができる活動にしたいと考えている。後日、参加者から「摘んだよもぎでよもぎだんごを親子で作りました」、「お味噌汁に大根を入れました」という報告があった。

## (2) 2021年4月

### 「はぴちる隊と春を見つけて草すべりであそぼう！」

4月は、各家庭に草すべりのための段ボールを持参してもらい、里山にある草の坂での草すべりや、3月のイベントに引き続き、春の植物や生き物に触れ、あそんだ。さくらんぼが赤く実っていたため、さくらんぼ狩りをする事ができた。「すっぱーい♪」と無邪気な笑顔が多く見られたイベントになった。後日、「ゲームに忙しい子どもが、久しぶりにはしゃいで楽しそうに何回も(草すべりに)滑りに行く姿に涙ました。子供なんだからこういう日もほんとに大事だと思いました。」という感想があり、この活動の意義を実感することができた。



## (3) 2021年7月

### 「はぴちる隊とひんやり♡感触あそびをしよう！」

7月には、スライム、片栗粉、草花を水の中に入れて凍らせた氷、色水など、様々な感触あそびコーナーを用意した。家庭だと、汚れることを気にしてなかなか経験できないが、外で思いっきり、子どもも大人も楽しんでほしいという思いで企画した。ひとりひとりが、興味のあるコーナーで感触あそびを楽しんでおり、「もっとやりたかった」という声が聞かれた。

スタッフの中にも、今回のあそびを経験したことがない隊員がおり、後日、職場の保育の中で行ったという報告があった。親子にあそびの機会を提供するだけでなく、スタッフにとっても、保育の引き出しが増えるなどの成果をもたらすことを確認できた。



## (4) 2021年11月

### 「はぴちる隊と秋を見つけよう！」

11月は、秋の植物が載っているビンゴカードを参加者へ配布した。そのカードをもとに、里山にある栗やはっさく、コスモスなどを見つけ、「あったー！」と子ども達の声が多く聞け、保護者と共感する場面が見られた。また、拾ったどんぐりやまつぼっくりをさつまいもの蔓で作ったリースの土台につけ、クリスマスリース作りも行い、玄関先に飾ったという報告が多くのお家庭からあった。

3月76人、4月50人、7月77人、11月50人の親子の参加があった。リピーターも多く、「次のはぴちるはいつ？」と子どもが楽しみにしているという報告もあった。マスク着用、検温、消毒など、感染対策をしっかりとりながら、これからも多くの親子にとって豊かな時間が過ごせるようなイベントを企画、運営していきたい。

子ども時代はあそび時代と言われる。あそびの中で様々なことに気づき、興味を持つことで、考える力、コミュニケーション能力など生きていく上で大切な力、非認知能力を身につけていく。あそびの中で「やった〜!」、「楽しかった〜!」という思いが溢れ、「自分ってすごい」と自信がついていき、そして、「次はこんなことをしたい」などと意欲が出てくる。スタッフは、このような思いを持ち、日々、保育者として子どもたちと関わっている。「はぴちる」で出会った保護者とも、そのような思いをできるだけ多く共有したいと考えている。そして、保護者に子どもと共に生きる「今」が愛おしく、大切だと感じてもらいたいという願いを抱き、これからも活動していきたい。

## 夏季保育セミナー（報告）

報告者：平野朋枝（名古屋短期大学 保育科）

2021年7月18日（日）に、本年度の夏季保育セミナーを開催しました。このセミナーは、名古屋短期大学と桜花学園大学を卒業した若手保育者を対象とし、保育に関する研修や旧友・恩師との再会の場として、毎年7月に開催してきました。しかし、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて中止を余儀なくされたので、今回は2年ぶりの開催となりました。プログラムについても、これまでは、講演やワークショップなどの研修活動と、分科会としての対話の場を設けておりましたが、感染予防の観点から、今年度は分科会を実施せず、人形劇団むすび座によるワークショップのみの企画といたしました。

日時 ● 2021年7月18日（日）  
 場所 ● 名古屋短期大学・桜花学園大学  
 主催 ● チャイルドエデュケア研究所  
 参加者 ● 36名

### ● プログラム ●

1. 開会式 10:00～  
挨拶、新人教員の紹介
2. ワークショップ 10:10～11:30  
「紙コップで作ろう『3びきのこぶた』」  
講師：人形劇団むすび座

夏季保育セミナー開校式を行った後、講師であるむすび座のお二人による自己紹介からワークショップが始まりました。途中から人形が登場し、プロの演技を見せていただくことで、ワークショップへの期待が高まってきました。



今回は、紙コップの人形で『3びきのこぶた』を演じます。まずは紙コップを用いてこぶた3体とおかみの人形を作ります。頭と体を別の紙コップで作って輪ゴムで接続することで、演じる時に動きが出せるように工夫されています。紙に印刷されたこぶたとおかみの絵に着色し、切り抜いて紙コップに貼ると人形の完成です。参加者の中には、紙コップにオリジナルのキャラクターを描いている方もいらっしゃいました。この人形の作り方を覚えておけば、いろいろな人形に応用ができてそうです。



人形が完成すると、講師によるデモンストレーションがありました。お二人がそれぞれ2、3役を担当し、4体の人形を器用に操って演じていきます。舞台装置として、厚紙で作ったわらの家、木の家、レンガの家を用います。これらの型紙も配布していただいたので、参加者は持ち帰って自分でできるようになっています。人形ごとに声色や話し方を変えることでそれぞれの個性が際立ち、いつの間にかお話の世界に引き込まれていきます。また、セリフに合わせた人形の動きが絶妙で、実際に生きているかのように感じます。例えば、ドアを「トントン」とノックする動作に合わせて二つの紙コップで作



られている体をくの字に曲げたり、こぶたが走って逃げる場面では胴体の紙コップを左右に細かく振ったりするなど、簡単なテクニックでも臨場感を出すことができます。

この後は参加者同士での実践です。4人1組となり、上演するための打ち合わせと練習が始まりました。初めて顔を合わせたメンバーもいましたが、すぐに配役やあらすじの確認がなされ、演技の練習に移っていくあたりは、「さすが保育者」という印象でした。



ある程度準備が整ったところで、全てのグループの上演が始まりました。4人それぞれが1体ずつ担当するグループもあれば、ナレーターがいるグループもあり、演出はさまざまです。共通の脚本はないので、役の演じ方や話の展開の細かい部分には独自のアイデアが盛り込まれており、二つと同じ作品はありませんでした。参加者の皆さんが日頃の保育で培ってきた技能を発揮するとともに、他者のアイデアや演技を学び互いに刺激し合う機会となっていたように感じます。

ワークショップ終了後、講師の方から参加者へ、紙コップ人



形の作り方と上演例の動画を期間限定で共有していただきました。コロナ禍において保育者の研修が実施できないという状況を知り、動画を作成して下さいました。コロナ禍にあっても子どもたちに人形劇の世界を届けたいという思いは、参加者も同じだと思います。子どもに関わる者として、「いかなる状況でも子どもたちのためにできることをしよう」というメッセージのこもったワークショップになりました。ご協力いただいたむすび座の方々に、心より感謝申し上げます。

## PROFILE

### 人形劇団むすび座

1967年に東海地方で初のプロ人形劇団として名古屋市に誕生。創立以来、「子どもと子どもをむすびます」「人と人とをむすびます」を合言葉に、心の糧となる人形劇を提供されています。

## 冬の講演会(報告)

### コロナ禍における保育

—子どもと保護者を支える保育者の専門性—

乳幼児教育実践研究家 井桁容子 先生

報告者：田端智美（桜花学園大学）

2021年11月21日(日) 13:30～15:00、リモートにて講演会を実施しました(参加者217名)。昨年度に引き続き2年目のリモート実施となりました。井桁容子先生から今年の研究所のテーマである「安心・安全な保育」について講演がありました。当日の講演とパワーポイントのスライドより報告します。

**井桁先生(以下敬称略)** ● 周りの大人が安心・安全でない、子どもの安心・安全は保証されないので。

この写真を見てわかることを話してください(写真には子どもが映っています)。チュールリップやつつじが咲いているので、春だと季節を話す人もいます。またこの子どもを女の子と見る人もいます。この子どもが見ているものはヘリコプター、お花畑、小鳥の囀りと答える人がいます



ピンクの服を着ているので女の子と判断してしまう人もいます。しかしそれはジェンダーを考えずに思い込みをしてしまっている保育者であると井桁先生は指摘しました。また女の子が見えているものをわかってしまっている保育者(特に経験年数が長い保育者)は、思い込みをしていると指摘しました。同じものを見ていても、保育者それぞれに特性があることがわかりました。

**井桁** ● だからこそ、人は学ぶ必要があります。人間の脳は勝手にパターン化をしてしまいます。勝手にデフォルメする癖があります。よって直感からくる誤謬(思い込み・決めつけ)を見直すため、しなやかな思考を身につける必要があります。直感的、本能的、経験的に終わらせずに注意深く考え、物事をよく見て、他者の話に耳を傾ける必要があります。自分が正しいとは限りません。自己批判と謙虚さが必要です。つまり知ることが大切です

保育者は、見間違いをしているかもしれないということを常に認識して、自分の保育を外側から見る必要があることがわかりました。そして話題は、コロナ禍の子どもの心の話になりました。

**井桁** ● 今、私は悲しい思いをしています。なぜなら、子どもの自殺が増えているからです。そして子どものリストカットも増えています。コロナ禍に、大人が子どもの前で、ネガティブなことを多く言っている状況をよく目にします。そのことに子どもは心を痛めています。保育者はそうであってはいけません。今こそ、保育者は子どもの育ちを支える専門性を発揮するべきです。子どもたちが何に困っているのか、どんな大人を求めているのか探るべきです

保育者の専門性について話は続きます。次にコロナ禍の子どもの生活の変化について、子どもの発達に関連付けてお話がありました。

**井桁** ● コロナ禍で子どもの生活に変化が見られます。そこで、マスクをして保育することについて、遠藤利彦先生と対談しました。多くの保育者から、マスクをして保育をすることについて、子どもの心の発達に影響があるのではないかという質問があります。子どもは顔の上半分を見ます。ヒトの目は心を読むための道具です。お母さんがどんなに素敵な笑顔をして、子どもは口元よりも目を見ます。食についても、子どもは保育者の口元だけで咀嚼を感じるわけではありません。言葉の遅れについても、目の見えない子どもが言葉の発達が遅れるということはありません。それよりも、どんな気

持ちで子どものそばにいるかの方が影響力はあります。ヒトは目を合わせて心を読み取るようにできています

私たちは、マスクをして保育をすることに、大きな影響力がないことがわかり安心しました。そしてマスクの上に覗いている目が大切であることを改めて確認しました。次に、生活の中でどれくらい子どもの目を見ているかということに話題は変わりました。スライドの写真は2人の赤ちゃんが目を合わせているものになりました。

**井桁** ● ある園の保育を見ていると、30分間、保育者と子どもが目を合わせていないということがあります。後ろからずっと抱っこしてしまったり、おむつ替えの時、目を合わせていなかったり、保育者が赤ちゃんを目線に合わせていないことがあります。赤ちゃんは、相手を知ろうとする時、分かり合いたい時、分かり合えた時、必ず相手の目を見ます。これは心が繋がることの原点です

これができていないと保育において安心・安全は保証できないと井桁先生は言います。目を合わせるからこそ、心の安定のための原点であることがわかりました。次に筆筒から靴下を引き出している子どもの写真が映りました。

**井桁** ● この光景を見て『ダメでしょ』『いいね』どちらを言いますか? 『ダメでしょ』派の人は『子どもは何もわかっていない』という保育者です。『いいね』派の人は『引っ張り出せるようになったのね』『OOくんの靴下探してくれてありがとうね』『興味があることを発見したのね』と、子どもの行為には訳があると思うことができる保育者です。保育者は『いいね』派である方が、専門性が高いと言えます

次はイヤイヤ期の話です。イヤイヤ期について、井桁先生は幼児番組や育児雑誌で多く取材を受けるそうです。

**井桁** ● 『イヤイヤ期』ではないのです。表現を変えてみましょう。『イヤと言える期』が来たのです。あなたと私の考えが違うという『わかってもらえない期』なのです。保育者が、イヤと言ってはいけないと注意してしまうということは、自分の思いを持たなくていいということになります。イヤイヤ期について、保育者の専門性を生かして、保護者にどれくらいきちんと説明できていますか。子どもの思いはどこにあるか考える必要があります。子どもが、思いを受け止められないまま、大人の都合でイヤイヤ期を抑え込まれると、4～5歳で他の人の話が聞けなくなってしまいます

イヤイヤ期のこの時期は、保護者が虐待を始めやすいそうです。ここを保育者が専門性を生かして説明するだけで虐待の数は減らせるのではないかと井桁先生は考えます。次のスライドは、子どもと保育者が手を繋いでいる写真です。

**井桁** ● 子どものわかってもらえたという経験は、他者の気持ちをわかろうとすることに繋がります。

子どもと保育者が手を繋ぐ際、子どもが掴んでいるか、子どもを掴んでいるかで、その保育者の専門性が判断できます。足を見てもそうです。子どもの思いを推測って、後ろから歩いているかどうか、そういったところから保育者の専門性は判断できます。この行為を子ども達・保護者は見えています。人間の赤ちゃんは6～10ヶ月で親切な人はわかると言います。子どもは、保育者が他の子どもにどんな行為をしているかを見えています。保護者も保育者が子どもにどんな行為をしているか見えています。子どもも、保護者もこのような一瞬の関わりの中から、安心・信頼を推測っています

信頼できる関係作りは、日頃の保育の一瞬の行為の中でできることがわかりました。

**井桁** ● 保育者の感情は子どもに伝染します。言葉によるコミュニケーションは全体の数%です。声色・視線・仕草・表情・口調・身振りなどは無意識にしてしまうので、本音が現れやすいのです

私たちは、自分自身の行為を外側から見る必要性を確認しました。そして子どもに安心・信頼を与えているかどうかを再確認しなくてはいけないと思いました。次のスライドは、窓辺で植物の影に見惚れる赤ちゃんの写真です。

**井桁** ● 子どもが何に見惚れているか気づくことができる保育者であって欲しいと思います。子どもの状況お構いなしに、後ろから抱き上げて連れていく、日常にこんな不安を感じる関わり方をしていないか確認するべきです。これは学ぶ意欲の育ちに関わってきます。自分の思いとお構いなしに、勝手に体を触られることはどれだけ不安なことか考えてみましょう。あなたが犬男に後ろから抱き抱えられたら、どれだけ不安になるでしょう。本来なら、正面から『〇〇ちゃん、おむつ変えようね。今から体を触るよ』と声をかけるべきなのです。言葉をかけずに体に触っていませんか

私たちは、知らず知らずのうちに子どもを不安にさせてしまっていることが少なからずあることに気づきました。そして、保育者間でそのことを注意しあう関係でなくてはいけないことに気づきました。

**井桁** ● 佐伯胖先生（心理学者）は言います。『さわる』というのは、一方的な自分の思いだけを押し付ける行為です。『触れる』というのは相手のことを慮って関わる行為です。保育者は『触れる』でなくてはならないのです。皆さんは子どもの体に触れていますか。さわっていませんか

その後、井桁先生は、不適切保育について、厚生労働省の調査結果の5つの類型を述べました。

- ① 子ども一人一人の人格を尊重しない関わり
- ② 物事を強要するような関わり・脅迫的な言葉がけ
- ③ 罰を与える・乱暴な関わり
- ④ 子ども一人一人の育ちや家庭環境への配慮に欠ける関わり
- ⑤ 差別的な関わり (厚生労働省資料より)

私たちはこの5つについて省みる必要があることがわかりました。

**井桁** ● イヤイヤ期に、保護者はダメダメと言ってしまいます。しかしこれは成長の一環であると保育者は伝えなくてはなりません。『いいね期』であると伝えなくてはなりませんね。DND（どうして・なん・だろう）で子どもを見れば、人と繋がり、興味の範囲、思考が広がります

子どもも大人も、いつもDNDで物事を考えることを学びました。

**井桁** ● しかし、昨今、結果を急ぐ・待てない・成果主義・失敗を恐れる・子どもや他者を信頼できないといった大人（保護者・保育者・教師）が少なくない状況です。日本では、頑張らないと許されない・みんなと同じでないと不安・人間関係のフラット化・若者の自殺が世界で一番といった状況です。行き先が不透明で何が起るかわからないVUCAの時代、決まったことを決まったようにしかできないというのでは生き抜いていけません

社会で求められているものは変わりました。決まったことを決

まったようにするのはAIでもできます。私たちは、過去と未来を学び、子どもたちの未来に想いを馳せて、子どもとの関わり方を考えるべきだと井桁先生は言います。

**井桁** ● もともとヒト

は、みんなで子どもを育ててきました。親だけでは、ヒトの子どもは育ちません。子どもは安心している状態であると他者から学べます。保護者や保育者から安心をもらって『自分はこのままで大丈夫』と感じることが大切です。このように安心が保障されている子どもの心は育ちます。生物学的親と社会的親の2つの存在がありますが、保育者は社会的親です。よって子どもの心の育ちにおいて、半分の責任は保育者にあるのです。

『子を持って知る、子の恩』これは私が作った言葉ですが、私たちは子どもを通してたくさんの学ぶことができます。私たち大人が忘れてしまったことを、子どもから学ぶことが多くあります。このことを保護者に伝えていくことは保育者の使命でもあります

そして、井桁先生は、不揃いな形の積み木を、四角い箱の中へ詰めようとしている3歳の子どものエピソードを話しました。子どもは、10分ほど詰めることに挑戦しています。そして悩んだ挙句『明日考える』と言いました。子どもは私たちに『諦める』ではなく『明日まだ可能性が残っている』ということを教えてくださいました。このように私たち大人が忘れていたことを子どもが教えてくれます。とても深い話でした。

**井桁** ● 自立した人とはどんな人でしょうか？なんでも一人でできる人ではありません。失敗した時に他者に助けを求めることができる人です。助けを求めることができる人の方が安心の中にいます。保育園では、保育者ができるまで手を出しませんという場面があります。それでは子どもの中に安心が育ちません。保育者が子どもに『できないなら言ってね。手伝うよ』と示すことで、子どもの中に安心が育ちます。

大人の指示通りにできるということでは、主体性が育ちません。心も育ちません。自分で課題を見つけて、わかるところまでいける子どもが、主体性のある子どもということです。創造性・やり抜く力・思考力は2歳で十分に持っています

いろいろな個性がある花があるように、子どももいろいろな個性を持っています。井桁先生は、『花屋さんは一つ一つの花の特性を知っている専門家』であり、保育者は『子ども一人一人の特性を知っている専門家』であると言います。

**井桁** ● 保育者は、自分が古い見方考え方を持っているということに自覚する必要があります。古い見方考え方とは、子どもは無能で受け身の存在であると考えること、またペアレンティング（親による育児）が良いと考えることなどを言います。みんな同じようにできるようにするという、また教えて、させて、できるようにするという古い見方考え方です。こういったことをパラダイムシフト（価値観の変容）させていかななくてはなりません。またトランスフォーミング（メタ認知）していかななくてはなりません

そしてスライドは子どもが泣いている写真に変わります。



## 冬の講演会

**井桁**●子どもが泣いているときに、保育者がどんな対応をしているか子ども達は見ています。子どもは、お友達が困っている時にどんな対応をすれば良いか保育者を真似るのです

そして、倉橋惣三の『育ての心』の「廊下で」が紹介されました。井桁先生はうれしい先生になるべきだと言います。うれしい先生とは、子どもの、その時々的心持ちに共感してくれる先生です。

**井桁**●立派な保育者、完璧な保育者であろうとするよりも、子どもにとって『うれしい』保育者になるということが大事です。そして、優しさは自発的な行為で、子どももまた優しくされてその心が育つのです

次に、保育指針の一部が表示されました。

**井桁**●保育指針の中には、一人一人という言葉が何度も出てきます。一人一人というのは、そこにいるすべての子どもが一人残らずという意味です。一人一人が安心していくことで、心の育ちができます。一人一人と関わることで、生活の中の関わりの、質の重要性に保育者は気づくべきです。保育は集団で束ねることではありません。一人一人を大事にしていくことの中で、個々の心が育っていくのです

次は、アタッチメントについての話です。

**井桁**●0～2歳児の保育の中で、子ども自身が自分の体の状態をよくわかることは、大切な課題です。時間が来たから食べるではなく、お腹が空いた時に食べたいと思うことが大切です。大人の都合で食べさせたりすると、自分の体のことに気づくことができなくなってしまいます。子どもが、『なんだかイライラする』といった時に、『お腹が空いた』と言えなくなってしまうわけです。ですから毎日同じではない、一人一人への応答的な対応が大事なわけです。アタッチメントの視点から見ると、情緒的利用可能性が重要です。情緒的利用とは、その子どもがして欲しい時に、その時に、保育者の優しさがあって一致していることです。大人から押し付けるものではありません。大人が敏感すぎると、過干渉になったり、先回りになったりします。保育者の経験だけでとらえてしまうと、つまり1歳児の発達はどうだからと決めつけてしまうのも危険です。子どもの権利条約の中では、主観的確信と言われています。本人が求めていたかどうか重要です

大人が子どもに一方的に優しさを押し付けていないか、日頃の保育を見直す必要があります。子どもの思いを尊重することを再確認しました。

**井桁**●これからの保育・教育が目指すことは、主体的・対話的・深い学びの3つです。子どもの主体性は、ないものを育てていくのではなく、あることを信頼し、丁寧な関わりの中で支え、伸びやかに力強く育むものです。一人で生きていけないから、みんなで助け合って、得意な分野を發揮しながら、共感しながら生きるわけで、そこには相手とのやり取り、対話が必要なわけです

保育者はドッジボールのような一方的な会話になっていないか確認しなくてはなりません。キャッチボールのような対話的な会話になっているかを確認しなくてはなりません。このような主体的・対話的・深い学びを感じる保育に、0～2歳の時に出会えるかどうか重要ですと井桁先生は言います。

**井桁**●私たちは、今、子ども達に、折れない心を持つ、情緒が安定した幸せな大人になることを願っています。逆境から立ち直る力(レジリエンス)を持つ大人、しなやかな考え方ができる人間にな

ることを願っています。共感されずに厳しく関わられた人の方が打たれ弱いのです。そうならないように子どもに共感すべきです

ここで井桁先生は、保育における対話の単純化、平板化を指摘します。これは保育者がよく口にする言葉でした。

**井桁**●『貸して』『いいよ』『ごめんね』『いいよ』『順番』『みんな』『壁ぺったん』『おすわりポン』『お口チャック』『手はお膝』は、人間の子どものロボットにしてしまう言葉です。子どもは、このような言葉を使うことによって、自分の気持ちを押し殺したり、嘘をついたりしてしまいます。何も考えない子どもになってしまいます。パターン化された保育から脱出しないとダメです。結果を急ぐ保育になっていませんか。言葉に頼りすぎの保育になっていませんか。人として生きる楽しさに気づく保育になっていませんか

ここで井桁先生は、自身の造語『Doingの保育』『Beingの保育』について説明しました。

**井桁**●『Doingの保育』は形や出来栄を意識した保育です。『Beingの保育』は人としての在り方を意識した保育です。今の時代『Beingの保育』に変わって行くべきではないかなと思います。

保育や教育、子育て観の中にある思い込みはフォーカシングイリュージョンです。私たちは、比べることや同一性の重視、結果や成果を求めることが良いことだと思っていました。しかし、これは間違っていました。比べないことや個性の尊重、意欲や満足感を得ることが今の保育には必要です。これが『Beingの保育』です。

教えられたことを覚えてできるようになるのは、みんな同じようにできる意味記憶です。意味記憶について人間はAIには敵いません。しかし今、人間らしさとして問われるのは、経験を通して感じ考え、分かるということです。人間の脳だけがエピソード記憶をできるのです

最後に素敵な言葉をいただきました。

**井桁**●今を大切に 子どもも 保育者も 自分自身も 育て急がず 頑張りすぎず ありのままを 大切に 面白がる 柔らかくて 温かいまなざしの 保育者に 子どもたちは 出会いたがっている



人として楽しく生きることを、私たちは子どもたちに教えることができているだろうか？ この「教えることができる」という考え方が、古い考え方であるかもしれません。人として楽しく生きることを、子どもと共感していく保育者、これこそが今の時代に求められている保育者であると感じました。そして共感して行く過程に安心・安全な保育があることを考えました。

## 参加者 アンケート (抜粋)

講演後に多くの皆様から、井桁先生への感謝の気持ちを込めた感想をお寄せいただきました。

紙面の関係上その一部を掲載させていただきます。

- 井桁先生の話が分かりやすく、とても勉強になりました。これからの保育に生かしていきたいです。
- 経験年数ある先生の「いつもの事」の見直しから始めようかと思いました。
- 自分自身、完璧な保育者にならないと、と頑張っていました。嬉しい保育者になろうと聞いてとても共感できました。これからは、子どもの視点に立って、謙虚に保育していこうと思います。
- 気持ちがほっこりすると同時に、乳児保育の重要性を改めて学び、自身の子どもたちとの関わりを見直すきっかけになりました。
- 大変わかりやすく聴き入ってしまいました。子どもをわがやとする意識を持つこと、ステレオタイプな保育にならないようにすることなど、基本的なことに立ち返る必要性を感じました。
- 「イヤイヤ期」でなく、「イヤイヤと言える期」など、違う視点で子どもをどう捉えるかによって、保育士の心や働きかけ方に大きく影響することを再認識しました。同時に複数で保育するときの子どもを中心とした見方を話しあうときも、それぞれの人として持っている良さを認め合えるような先輩保育士も傷つけない話し方も、学ばせて頂きました。
- 「育て急がず、頑張りすぎない」という言葉が心に残っています。子どもにとっていい保育とは何かきちんと考えつつ、育て急がずゆったりと関われるようにしていきたいと思います。
- 乳児クラスの担任をしているので、自分の保育の仕方を見直すきっかけになりました。
- 子どもと関わるときに大切な一人ひとりの子どもの発達や心理を丁寧にとらえる視点を具体的に大変わかりやすくお話くださり、保育者のあり方、専門性について改めてその重要性を考え直し、学び直すことのできた良い機会となりました。ありがとうございました。
- 改めて、保育者としての専門性を学ぶ事が出来ました。固定観念で子どもたちと関わるのではなく、「どうして(D)なん(N)だろう(D)」と子どもに寄り添い、子どもの行動を色々な視点から考えて見ることが大切だと改めて感じる事が出来ました。また、子どもの気持ちを理解する事が信頼関係を築けることはもちろん、子どもの主体性や心の育ちに繋がることを痛感しました。今後の保育の中で、色々な「なんでだろう」を考え、子どもたちにも保護者にも「嬉しく・安心できる保育者」になれるように保育に努めて行きたいと思います。
- 「保育者が普段子どもにしている対応(行為・仕草)は他の子どもや保護者が見ている」という言葉にはハットさせられました。日々の保育を見つめ直すヒントが沢山詰まった講演でした。
- 講演会の表題にふさわしい内容でした。長年にわたる保育現場での子どもの心が育ったと感じた瞬間の写真の1枚1枚から保育者の見えているものを問うスタートからの講演で「今こそ、保育者が専門性を発揮するとき」のメッセージが心に響きました。職場で共有していきたいと思います。ありがとうございました。
- 今は保育園で保育者として子どもたちと過ごすことに精一杯な部分もありますが、研修を通して去年まで大学で学んでいたことを思い出しながら自分の保育を振り返るきっかけになりました。
- 毎日の活動に追われ、子どもの目の高さに合わせず、時間に追われるように保育している保育士がたしかにいるなと思いました。子どもの目の高さに合わせ、子どもの気付きや思いに気づける保育士を育てていきたいと思いました。
- 明日からも、子育て支援でお母さんたちと子どもの育ちを一緒に共感し、子育ての楽しさを感じてもらえるようにしていきたいと思いました。
- 短い時間でしたが、とても参考になり、また自分の保育を見つめ直すいい機会になりました。子どもにとって安心、安全とはということをもう一度考え直して明日からの保育に繋げていきたいと思ひますし、今日の話をも園全体で共有(難しいかもしれませんが)できるようにしていきたいと思いました。コロナ禍だからこそ、保育の専門性を発揮する時なのかもしれません。私自身まだまだ勉強不足で、自慢できるような保育はできていないのですが、少しでも子どもたちの未来につながるような保育を心掛けていきたいと改めて思いました。
- 今回の講演会を聞いて、子どもの行為にはすべて意味があることを頭に入れ、子どもにとって良いことなのかを考えながら保育をしていく重要性について強く感じました。今後は今まで以上に日々自分の保育を振り返り、「育て急がず」「子どもにとって嬉しい保育者」になれるようにという気持ちで、子どもたちと応答的に関わっていこうと思います。ありがとうございました。
- 日頃の保育を見つめ直すよいきっかけとなりました。これからも、一人一人に寄り添った保育を心がけて、子どもの、今だけではなく、これからを培う力を伸ばして行けるよう、常に自問自答しながら思い込みの保育をする保育者にならないよう心がけていきます。
- 今0歳児の保育をしていて、マスクをつけて保育することに問題意識がありましたが、井桁先生の話聞いて安心しました。これからも優しい眼差しで保育していきたいと思ひました。
- 名古屋短大を卒業してやがて50年、公立保育園に40年勤務し、その後、10年認定子ども園の乳児保育の立ち上げに関わってきました。乳児保育は0からのスタートで若い職員と試行錯誤でしたが、自分自身が常に学ぶことの必要性を伝えてきました。今回も井桁先生の研修に恵まれうれしく思いました。とてもわかりやすく、子どもを大切にすることを改めて学びなおしました。さっそく園内研修で伝えていきたいと思ひます。ありがとうございました。

## 子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのインタビュー

子育て支援室には対象年齢を決めた交流会と、どの年齢の子も参加できる開放日があります。「さくらんぼ」に参加された保護者の方々へお子さんの様子や利用された感想などを伺いました。

### Q コロナ禍での毎日の子育ての感想は？

- 家の中でずっと過ごして飽きてしまいました。
- 誰ともしゃべれなかったため、辛かったです。
- 早くコロナが過ぎてほしいと思いました。
- 気軽に出かけることができず、子どもを連れて外出することに躊躇します。
- 友達を家に呼ぶことができず、人と会うことができなくなり、公園に行くことが多くなりました。
- 外には本当に出ませんでした。上の子がいたからまだよかったですが、一人っ子家庭だと遊び相手がいなくて大変だと思います。
- 公園にも行けず、遊ぶ場所もなく、自分が相談するところもなく、ストレスです。
- 気軽に外出できないため、「さくらんぼ」があって助かります。ただ、予約制のため、予約するのが面倒です……。
- 身内に子どもを預けることもできず、大変です。
- 兄弟がいるため、普段とあまり変わらず不便はありませんでした。

### Q コロナ禍での子育てで工夫していることは？

- あまり外出ができないので、家で子どもと一緒にご飯を作ったり、パンを焼いたりして楽しんでいます。
- コロナ禍の自粛で体重が増えてしまったため、毎日子どもとお散歩を始めました。
- コロナ太り解消のため、動画を見ながら子どもと踊って体を動かしています！
- 買い物も出られなかったため、夫がいる時に一人でサッと行って買い物を済ませています。
- 人混みには行かず、外遊びをしていました。



### Q 支援室に来るきっかけは何ですか？

- 友達に誘われたから。
- 豊明市の情報から「さくらんぼ」について知り、家が近いこともあって来ました。
- 付属幼稚園のホームページで知り、来ました。
- 付属幼稚園に上の子が通っており、園からのチラシで知り、通うようになりました。
- 卒業生なので支援室のことを知っていたから。
- 知り合いに教えてもらいました。



### Q 支援室を利用される理由は何ですか？

- 他の子の様子を見ることができて、気持ちが和むから。
- いろいろな人と接することができ、自分もリフレッシュすることができるから。
- 子どもの発散のためと、自身の癒しのため。
- 安心して遊ばせたいから。
- 天候に関わらずいつでも遊べるから。
- 家とは違う環境で遊ばせたいから。
- 友達との触れ合いや遊具がたくさんあることが魅力だから。
- 同年代のお子さんと一緒に遊ばせたいから。



### Q 支援室を利用された感想は？

- とてもありがたいです。
- 他の利用者さんと顔見知りになり、安心できます。
- 他の施設では場所は開放してくれるものの、親が遊ばなくてはならないが、ここは先生が遊んでくれ、子どもも楽しく遊べ、母親同士のおしゃべりができて楽しいです。
- 人見知りだった子が、慣れてホッとしています。
- 環境も保育士さんも良いです。子どもも気に入っています。コロナ前は学食にも寄っていました。
- 施設がきれいで気に入っています。



### Q 今後支援室に求めるもの(期待すること)は？

- 満足しています。学生さんが来てくれて関われば嬉しいです。
- 予約なしでいつでも来られるといいです。たくさん来たいです。
- 水曜日以外にも午後の開放日があるとよいです。(午前より午後の方が子どもの機嫌がよくぐずらないから)
- お誕会や身体測定などがあつたらいいな。



昨年度に引き続き、今年度もコロナ感染症予防対策として、一回の利用人数制限を行っての「さくらんぼ」開室となりました。今年は、昨年より開室できる日も多く、たくさんの方に利用していただくことができました。「さくらんぼ」では、元気いっぱい遊ぶお子さんたちの笑顔が見られ、皆さん毎回来室を楽しみにしてくれました。コロナ禍のこんな時だからこそ、ゆったりと安心して遊べる空間を共有できるようにし、笑顔が絶えない場所作りに心がけていきたいです。

(文責 吉田真弓)

## ■ 2021年度 子育て交流会、支援室開放日 利用者数 2022/3/11 現在

	交流会/回	子ども	大人	開放日/回	子ども	大人
4月	8	31	29	6	31	26
5月	3	5	5	1	6	5
6月	1	7	6	2	13	13
7月	8	33	28	4	30	27
9月	0	0	0	0	0	0
10月	7	36	34	6	48	45
11月	11	51	41	8	55	49
12月	8	45	36	5	38	35
1月	9	39	34	5	36	30
2月	10	49	36	6	34	28
3月	5	32	24	3	30	27
計	70	328	273	46	321	285

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため9月は閉室とさせていただきます。



## 2022年度事業計画

チャイルドエデュケア研究所では、2022年度の暫定テーマを「子どもの主体性を育む環境を考える」としました。このテーマに沿ったセミナーや講演会等の開催を通じて、地域の保育者や子育て家庭、学生、卒業生を対象とした研修の機会を提供し、地域とのつながりを重視した事業を展開していきます。地域で活躍されている子育て支援のNPO団体等とも連携し、ネットワークを大切に交流していきます。子育て支援室「さくらんぼ」での子育て交流会等も、感染症対策を徹底しながら実施いたします。

### 夏季保育 セミナー

- 講 演：汐見和恵氏
- 演 題：子どもの主体性を育む保育で本当に大切にしたいこと
- 日 時：2022年7月17日(日) 13:30～15:00
- 場 所：桜花学園大学・名古屋短期大学

### 冬の講演会

- 講 演：佐藤将之氏
- 演 題：子どもの主体性を育む環境を考える
- 日 時：2022年11月20日(日) 13:30～15:00
- 場 所：桜花学園大学・名古屋短期大学

## 編 集 後 記

「チャイルドエデュケア研究所年報」第19号をここにお届けします。今年度は感染症予防のため、冬の講演会はオンラインの実施となり、子育て支援室も閉室した時期がありましたが、活動を継続することができました。本年報には、今年度の研究テーマ「子どもの育ちと安心安全な保育」に沿った内容で講演、ご寄稿いただき、研究所が主催する夏季保育セミナー及び冬の講演会、また子育て交流会等の報告といった研修・事業部門の報告、桜花学園大学保育学部や名古屋短期大学保育科の教員による研究・実践報告を収めています。研究者や地域の実践者だけでなく、子育て家庭の皆様にも、本年報をきっかけに、本研究所の取り組みをご理解いただき、これからの保育・教育・子育てについて共に考えていただければ幸いです。

### 【2021年度 研究所役員体制】

- |        |       |        |       |      |
|--------|-------|--------|-------|------|
| ●所 長   | 高須裕美  | ●主任研究員 | 平野朋枝  | 吉田真弓 |
| ●副 所 長 | 田端智美  |        | 太田早津美 | 伊藤茂美 |
| ●事務局員  | 本多美須子 |        |       |      |

## 表 紙 デ ザ イ ン

高田吉朗（保育科）